



PEACE, JUSTICE AND STRONG INSTITUTIONS

「美味しい」の一言で世界を平和に、豊かに



カンボジアのホテルの厨房にて現地のシェフと交流する船岡さん

夢はカンボジアに 料理学校を創ること

大阪・天満の黒崎でフレンチレストランを経営するシェフの船岡勇太さん。サッカー元日本代表の本田圭佑選手の専属シェフとして、本田選手とともにオランダやカンボジアをはじめ世界を歩きその国の食文化や考え方、現地の人々の暮らしを目の当たりにしてきた。そんな船岡さんの夢は「カンボジアに料理学校を創ること」。自分が正しいと思ったことはすぐに行動に移す。行動することで誰かが救われる。そんな強い信念を持つ船岡さんの夢に迫った。

「美味しい」の一言から世界平和を

本田選手に同行して訪れたカンボジアで、船岡さんは現地の市場で食材を購入しようとした。そこでは子どもたちが夢や希望を持たず、ただ家族を支えるためにひと月2ドルというごく僅かな給料をもらいながら働いていた。そして現地の料理人たちは決して衛生環境や調理器具が揃っているとは言えない、そんな環境下で調理し料理を提供している。

船岡さんは「この人たちに料理の技術や知識を入れ込めば、カンボジアの未来、子どもたちの未来は明るくなる」と確信しているという。それは「美味しいものが集まるところに人は集まり、美味しいものを食べたら心は豊かになる。食欲が満たされたら他人を傷つけようとも思わなくなる」という人間の心理に沿ったシンプルな考えがあるからだ。

美味しい料理を作る人を育て、美味しい料理を食べた人が「美味しい」「ありがとう」と感謝する。ただ料理を作るだけでなく、料理を通して関わった人がどうなるかを考えることが持続可能で平和な世界へとつながっていく。船岡さんは今日も大阪のフレンチレストランで、コロナ不況で打撃を受ける生産者や消費者に寄り添いながら料理と向き合っている。

取材後記

1時間の取材の中で印象に残ったことは数多くあったが、中でも船岡さんはとても人を大切にされている方だというのが取材を通して強く感じた。これからは「個」が重要になってくる時代で、自分の周りにどれだけ人を置き自分自身が「最強のミッドフィルダー」になれるかだと語る船岡さんの言葉には唖らされた。



Funachef の店内の様子

取材先：船岡 勇太さん

滋賀県甲賀市出身。大阪・天満にあるフレンチレストラン Funachef のオーナー。サッカー元日本代表本田圭佑選手の専属シェフを務めていたこともある。

取材者：亀石 弥都

立命館大学スポーツ健康科学部 4 回生。兵庫県加古川市出身。趣味はスポーツ観戦で、特にサッカーは多い時に 1 日 4 ゲームを観ることもある。





つくり、使うことでごみの削減を



自然に優しいワークショップ開催の様子

好きなことをきっかけに できた「つながり」

自粛期間が続く中、「地球に優しいアップサイクルワークショップ～マスク入れ編～」をオンラインで開催し、マスクケースの作り方を教える木村俊平さん。木村さんは、紙袋やお菓子の箱などから、財布や名刺入れ、手帳型スマホケースと様々なものを制作している。自粛期間以前はコーヒーショップでワークショップを開催するなど、家にあるものから実用小物をつくり、使うことでごみになるまでの時間を伸ばし、ごみの削減を目指す活動をしている。

元々ものづくりが好きだった木村さんは制作をしていくうちに作品のクオリティーも上がっていき、人に伝えたいという思いが強まった。そこで始めたワークショップは環境にやさしいだけでなく、木村さんにとって人とのつながりを楽しめる場へと変わったと語る。

経験を活かす活動から広める活動に

アイデアは、朝起きて布団の中で考えごとをしている時にふと思いつくという。試作してより簡略化を目指している際に、サイズを変えることで新しい作品が生まれたことも。他にも一見関係なさそうな経験がアイデアにつながることもあるので、無駄だと思うことでもできるだけ色々経験することが大切だと気づいたという。

木村さんがSDGsを意識するようになったのは、3年前の冬に段ボールから財布を作成する活動を知ったことがきっかけだという。それ以降、SDGsやアップサイクルを意識しているそうだ。

実際のワークショップでは、子供たちの自由な発想を大切にしながら制作活動をしている。

現在はコロナ禍の中でオンラインでワークショップを開催している。しかしオンラインでは制約も多く、「人と会うことに意味があると感じるようになった」と話す。今後は、更に認定講師を育成し、ワークショップの開催数を増やしたいと語る。

取材先：木村 俊平さん

NPO 法人日本エコロジーアップサイクル協会の理事長兼創設者。元キャノン株式会社の Senior Engineer。『エコロジーアップサイクル』を広め、一緒に作る人を増やす活動をしている。

オンラインワークショップへ参加

実際に「地球に優しいアップサイクルワークショップ～マスク入れ編～」にオンラインで参加した。すると木村さんはカメラを2つ使用し、1つは木村さん自身を、もう1つは木村さんの手元を映していた。Zoomの画面共有機能も用いて、作り方と実際の手つきとを交互に参加者に見せる。木村さんは作業中、参加者の進捗を細かく確認しつつ、参加者と様々な話をする。このワークショップでは楽しく交流しながら、それぞれが好きな紙袋からマスクケースを作成していた。

ワークショップでは、木村さんが進捗状況も細かく確認してくださることで、参加する子供たちにとっても参加しやすそうだと感じられた。

取材後記

この取材を通して、木村さんが自身の好きなことからマイアクションを見つけ活動をする際、人との関わりを大切にされていることを強く感じ、SDGsを達成するために身近にできる活動を探していく参考とさせて頂くだけでなく、私自身もこの活動を広めていきたいと思う。

取材者：中島 綾香

立命館大学経済学部1回生。滋賀県甲賀市出身。高校時代からSDGsについて関心があり、身近でできる活動を模索中。趣味は読書と映画鑑賞。





採れたて野菜が味わえる農家レストラン

生産者だからこそ話せる 野菜のストーリー



みのり農園で野菜を収穫している高橋さんご夫妻

滋賀県高島市にあるみのり農園で200種類もの有機野菜を育てる高橋佳奈さん。週末は夫の章隆さんとみのり農園で収穫した野菜を使用した農家レストラン sato kitchen をオープンしている。sato kitchen では、野菜をふんだんに使用し、野菜本来の味が楽しめる料理を提供している。ただおいしいだけじゃない種から野菜を育てている高橋さんだからこそ伝えられる野菜のストーリーがある。そんな高橋さんの野菜への思いを取材した。

美味しいのその先へ

高橋さんはもともと務めていた会社の新規事業として有機農業を経験し、自分が育てた野菜を食べて喜んでもらえることを仕事にしたいと思っていた。そこで、地元である滋賀県に戻り、農業に適している黒ボク土がある高島市で元料理人の夫の章隆さんと「みのり農園」を始める。しかし、みのり農園の野菜は飲食店への販売しかしておらず、野菜を食べてくれるお客様の顔や反応が見えなかったという。そこで、お客様と顔を合わせてその野菜の美味しさを伝えたいという思いから、念願の農家レストラン「sato kitchen」をオープンした。野菜は土の中で大きくなったり、木にぶら下がっていたりと野菜は土により成長している。その中でも化学合成肥料・科学合成農薬を使用しない有機農業は、自然と野菜と向き合いながら葛藤の日々だそうだ。しかし、「野菜には色や形、栄養素など、それぞれの特徴があり、手間暇かけて自分たちで育てている野菜だからこそ伝えられることがある」と高橋さんは話す。加えて、「聞くだけでなく農業体験を通じ、自然とふれあいながら自分たちが口にしている野菜への思いを深めて欲しい」と高橋さんは熱く語った。

取材後記

現在、新型コロナウイルスの影響で Sato Kitchen の営業やみのり農園で収穫された野菜の出荷も滞っている中、オンラインでのプランター栽培や、農家さんたちの勉強会に参加するなど活発的に行動している高橋さん。この取材にも快く協力していただき、高橋さんの野菜への熱い思いが伝わった。



Sato Kitchen で提供されている料理

取材先：高橋 佳奈さん

滋賀県大津市出身。滋賀県高島市にある農家レストラン Sato Kitchen のオーナー。平日はレストラン近くの「みのり農園」で約200種類以上もの野菜を育てている。

取材者：中西 愛裕美

立命館大学食マネジメント学部2年生。滋賀県東近江市市出身。趣味は映画鑑賞で、邦画、洋画こたわらず色々なジャンルの映画を観ている。





人×SDGs×ロスフラワー ～人生に彩りを与える花に新たな命を～



河島さんのアトリエを訪問した宮川さん（右）

食べ物だけでなく花にも注目を。

現在ロス問題として食は大きな注目を浴びているが、花についてはどうだろうか。日本人にとってあまり身近に感じられない花の大量廃棄問題に対してスポットライトを当てる人々は未だに少ない。宮川さんは元々環境分野などに興味を持っていたが、自身の結婚式をきっかけに式場を彩る花が毎回大量に廃棄されている現実を知る。たった1日で消費され棄てられてしまう花の量を減らしたいと考えていたところ、偶然株式会社 RIN を立ち上げたフラワーリスト・河島春佳さんに出会った。宮川さんは少しでも多くの人々にロスフラワーの問題を自分ごとと感じてもらえるような機会を作る一方で、自分の価値観を押し付けないようにすることを心がけている。今後、人とロスフラワーの距離を縮めるイベントで人々のアクションに繋がるような企画、日本のみならず海外にもロスフラワーを発信したいと宮川さんは語った。

ロスフラワーと SDGs

宮川さんは、「SDGs は敷居が高い」や「問題に対して取り組む姿がすごい！」と受信者に感じさせるのではなく、ロスフラワーがいかに身近な問題で、自分ごとにする事の大切さを考えさせられるようなきっかけを作りたいと考えている。だが、一方的に自分の思う正しさや価値観を押し付けられないことも重要であると語る。

ロスフラワーと SDGs にはどんな関係があるのだろうか。株式会社 RIN では生花をドライフラワーにし、アクセサリーやインテリアとして再利用するワークショップを開催している。私自身、このようなイベントを行うことで持続可能な消費を実現可能にし、かつ環境に関するゴールの達成にも貢献できるに違いないと考える。宮川さんは SDGs を一つの共通のチェックリストとして活用し、花農家、消費者、ブライダル関係者などの間に入り、それぞれのアクターを繋ぐ役割を担うことでロスフラワーに対する認知度を上げていきたいと考えている。今後、結婚式など幸せなイベントが終わった後、普段ならば廃棄されてしまう花に新たな命を吹き込むイベントを企て、エシカル×RIN の実現、そして人々の今後のアクションに繋がられるようにしたいと語る。また、ロスフラワーについて知るきっかけを与え、自分の視野を広げてくれた RIN と他団体で SDGs のゴール 12 をベースとしたコラボレーションイベントの開催を将来的に考えている。

取材を終えて

今回取材をさせていただいて、「ロス問題」は我々に最も近い存在である食べ物だけでなく、花にもあることを私自身も今後発信していきたいと思った。日本には伝統的な華道の文化があるが、近年人々が花と触れ合う機会が減少しつつある。ロスフラワーをきっかけに新たな花の文化を創り出していくことも一つの案ではないかと考える。



新たな命を吹き込まれたドライフラワー

取材先：宮川 南奈さん

神奈川県茅ヶ崎市出身、現在は石川県金沢市在住。
幼少期をインドネシアで過ごした経験から途上国開発に興味を持ち、学生時代は MDGs や SDGs をはじめ、持続可能な開発について学ぶ。現在は株式会社 RIN のフラワーサイクルアンバサダーとして花農家の実態やロスフラワーについて日々発信している

取材者：関根 由夏

立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部
1 回生。埼玉県春日部市出身。APU
Colors、立命館 Sustainable Week
実行委員会に所属中。興味のある分野は
ジェンダー平等、LGBTQ、環境問題。





PARTNERSHIPS FOR THE GOALS

地域循環共生圏を目指して ～地域の思いと自分の思い～



政所茶のお茶摘み体験ツアーの様子

奥永源寺との出会い

兵庫県宝塚市に生まれた前川真司さんは、東近江市地域おこし協力隊への参加をきっかけに奥永源寺に魅了され、株式会社みんなの奥永源寺を設立した。奥永源寺では、政所茶や、木地師、絶滅危惧種の紫草、鈴鹿の山々など豊かな自然と文化がはぐくまれてきた。前川さんは、それらの資源を活かした地域循環共生圏の確立を目指し、日々活動を行っている。

自分の思いと地域の思い

「何も困ってないし、よそ者が何しに来た」、前川さんが奥永源寺に来て活動を始めようとした際、地域の人に言われたのはそんな声でした。地域が過疎化、高齢化して大変だという問題意識は、「外からの視点」であり、地元の人々は満足に自分の生活を送ることができている。前川さんは、自分の地域活性化への思いと地域の思いとのギャップに驚かされたという。それでも、前川さんが活動をやめなかったのは、「地域循環共生圏を構築したい、未来の子供たちに繋げたい」という思いがあったからだ。地元の人たちに理解してもらえなくても、まずは動いて、自分の活動・思いを地域の人に見せていく。そうすることで、地元の人たちに理解・応援をもらう、そんな関係づくりが大切だと語った。

取材後記

今回の取材では、地域活動をしていく上での前川さんの思いが印象的だった。特に、『誰一人取り残さない』ということは『全員参加の総力戦』という言葉はとても心に響いた。私も、自分の思いをちゃんともって、失敗を恐れず、積極的に活動していこうと思った。

循環を生み出すために

株式会社みんなの奥永源寺は、地元住民が株主の「地域株式会社」である。このような株式会社という形態で経営することで、地域の中で雇用を生み出し、経済を循環させる仕組みをつくっている。また、MURASAKI no ORGANIC という、鈴鹿の山々の豊かな水資源と、絶滅危惧種の紫草を活用した、人と環境にやさしい100%オーガニックの化粧品を開発、販売を行っている。

「産地」「官庁」「学術機関」「創造者」の「産官学創連携」の仕組みで多くの人たちに関わってもらうとともに、環境を汚さず、資源が循環する仕組みをつくりだした。



住民や高校生とムラサキを植えている様子

取材先：前川 真司さん

株式会社みんなの奥永源寺代表取締役。兵庫県宝塚市出身。中学の時に農村の魅力を知り、高校、大学では農業について勉強していた。SDGsが国連で採択される以前から積極的に活動している。



取材者：佐藤 彩香

立命館大学食マネジメント学部1年生。滋賀県生まれ、滋賀県育ち。高校時代は硬式テニス部に所属しており、現在は、Sustainable Week 実行委員会で地域や食、教育に関する活動を行っている。



すべての人が人らしくあるために ～人の幸せを考える～



憩メンバー談話風景

人に寄り添う団体

坂本さんは人に寄り添う団体を作りたいと考え談話サークル「憩」を立ち上げ、現在9人で活動している。人に寄り添うためには談話が有効であると考え、個人の好きなもの、趣味などについて、談話に参加して下さった方と談話を通して知り合うことによって「好きを形にする」ためのきっかけ作りを行っている。「ほっとできる場所を作りたい」。坂本さんは自分の意見を相手に押し付けることは絶対にしないように心掛け、憩が開催する談話の場に参加して下さる方が自分を認めることができる安心して過ごせる場所づくりを大切にしている。私も1人でいると不安になるので、個人にとって「ほっとできる場所」は必要であるとする。人に寄り添う団体とは「人の幸せを考えられる団体」だと感じ心が温まった。

人が世の物語を作る

憩は談話に参加して下さった方がその後、「自分でいられること」、「好き」というプラスの気持ちを生むことを目的としている。「憩」には「好きを形にする」ためにそれぞれアクションを起こしているメンバーがいるという。福祉を学んでいる人、人の気持ちに寄り添いたい人、小説やアニメで創作し、業界を変えたい人。憩には多種多様なメンバーがいるという。そして、憩のメンバーには「世の中の理不尽」を感じている人が多いという。坂本さんは「人が世の物語を作るのに、報われない人がいるのは可哀しい」と話す。坂本さんは世の中の理不尽をなくすために、世の中にその問題意識を広めようとしている。問題意識を広めるためには何が必要か。それは「わくわくする福祉を作ること」だと坂本さんはいふ。福祉と聞くと、精神をすり減らす等のマイナスイメージを強く持たれているのが現状だといふ、日常に「わくわくする福祉」を広めようとしている。「わくわくする福祉」とは、「自分が自分らしくいられる場所」、「ほっとできる場所」、「好きを形にできる場所」の3つがあることにより成り立つと坂本さんはいふ。

自分達にできること

憩のメンバーは現在、新型コロナウイルス感染拡大の中で「家の中で過ごすのはしんどい」という人に寄り添うために「自分がほっとできる瞬間」をTwitterにて発信している。「自分達がほっとできる場所があつてこそ、周りにもそれを広めることができる」と坂本さんはいふ。心に余裕を持ち、わくわくする福祉をTwitterやこれから行うイベント等で発信していこうとしている。人をほっとさせるためにはまず「自分達がほっとできているか」が大切ということで、私も心に余裕がないせいで相手を傷付けてしまうということがないようにしたいと思った。人に寄り添うために自分自身やその環境を変えようといった憩の考え方を私も取り入れたい。



取材先：坂本 健吾さん

同志社大学社会学部2回生。日々暮らす中で触れた人々の暖かさ、福祉を学んでいること、精神疾患の経験などを活かし、その場に来る人が自分は自分でいいんだ、と思える場を作りたいと思い2019年11月に談話サークル「憩」を設立。



取材者：徳田 祥吾

立命館大学工学部3回生。京都府出身。立命館大学 Sustainable Week 実行委員会、カラーガードサークル LUSTER に所属。「誰一人取り残さない」をテーマに様々な視点から、色々な立場の人が生活しやすい環境、ツール、仕組みを作りたいと考えている。





福祉を、農業を、社会をおもしろく



おもや農園でタマネギを収穫する利用者さん

農福連携の始まり

「地域の中で福祉をしたい」。杉田健一さんは、地元の滋賀県栗東市で NPO 法人縁活を立ち上げグループホーム事業をスタートした。元々福祉施設で事務員として働いていた杉田さん。その当時から宿直が好きでだったこともあり、途中で現場へ異動し障害者福祉に携わるようになったという。そんな杉田さんが障害者の自立支援のための農業「農福連携」を始めるきっかけとなったのは、グループホームの利用者が作業所へと出ていく日中、父の畑や田んぼ仕事を手伝うようになった時だった。「障害を持った人の作業所として、地域で農業ができないだろうか」。そして 2011 年 4 月、「おもや農園」がスタートした。ただ、開園当初の利用者は 1 名で作業所も手作り、2 年半ほどは赤字経営が続くなど、最初から順風満帆ではなかったという。それでも活動が続いたのは、原点である「つながり」を大切にしてきたからだ。

つながりから生まれる新たな取り組み

活動当初から拠点を栗東市に置き、地域の中で障害者が安心して暮らす、農業と一緒に働く。そして採れた野菜を地域の人に食べてもらえるようにランチを提供することに加え、地域の人が集まり歓談できるような場所としてカフェを運営している。全国とのつながりも欠かせない。愛媛県にある作業所の取り組みを知り、実際に足を運んだことが、おもや農園で自然栽培に取り組むきっかけとなった。現在杉田さんは、自然栽培パーティーという全国のネットワークの中で副代表を務めている。技術や経験を共有しみんなで成功できるように、辛い時はお互い助け合う関係を作っている。

そんな杉田さんは今後のことはあまり考えないようにしているそうだ。「今を楽しく一生懸命みんなできたら、きっと今後も良くなると思うから」。それでもやりたいことはたくさんあるらしく、その一つが「障害者だけでなくみんなが、つながっている安心感の中で暮らせる小さな村を作ること」だという。「誰もが自然体で暮らせる場所は町として豊かになる」。つながりを大切にしてくれた杉田さんらしい夢だ。

おもしろいことを見つける大切さ

今回、記事には書ききれないくらいいろいろなお話を伺うことができ、今後私の心にとどめておこうと思うものもたくさんあった。その中のひとつを最後に紹介する。「ずっと大切にしていることのひとつは『障害を持った人と一緒にできるおもしろいことをすること』。福祉の仕事も楽しいことばかりではない。悪いところばかりに目がついてしまうこともある。そんなときに発想を変えて、おもしろくないところにおもしろさを見つけること。そして、その取り組みをいかにおもしろく周りに言えるか」これまでいくつもの困難を乗り越えてこられた杉田さんの笑顔には、今を楽しく一生懸命、そんな思いがあふれていた。

取材先：杉田健一 さん

NPO 法人縁活を立ち上げ、2009 年滋賀県栗東市でグループホーム「すうほ」を始めた。2011 年、農を中心とした就労支援として「おもや」を、2015 年おもやの食材をを発信する「オモヤ☆キッチン」を始めた。



取材者：豊田真彩

立命館大学食マネジメント学部 2 年生。
食や環境に興味を持っている。





地域発、持続可能なまちづくりを実現する



海の生態系調査を行う太齋さん

太齋さんにとって海とは

「宮城県南三陸町から多くの人に海の生き物の面白さや自然との共生の大切さを伝えたい。」と語る太齋さんは、町に移住後、遊休施設をネイチャーセンターとして再生し、本格的に活動を開始。大学時代から海の研究をしてこられた太齋さんによれば、地球の2/3は海であり、陸上の生き物も海の生き物から進化してきた。そのため海を知らないという事は、地球を知らないのと同じであるという。そうした背景を踏まえて、海と陸との関係はとても重要で、両者の関係をしっかり考えるべきだとしている。ネイチャーセンターを教育と研究の融合の場として活用すべく、各地の生物・生態系の研究者を巻き込んだ活動を行ってきた。しかし2011年3月11日、東日本大震災が発生し南三陸町やネイチャーセンターは甚大な被害を受けた。ネイチャーセンターは活動休止を余儀なくされ、太齋さんは震災後、行政職員という立場から、町の水産業の復興や地方創生事業に尽力された。

町の復興と持続可能な社会に向けて

震災からしばらくし、町の復興が一步ずつ前を進み始めた頃、太齋さんが今一度自分がやりたい事は何かと考えた。するとやはり、「海に関する教育や生き物の面白さを伝えたい」という思いが強かった。そこで行政職員を辞め、南三陸町内で「森・里・海」の連携を深めるサステナビリティセンターを設立し、活動を再スタートする。

太齋さんは「森・里・海」の連携の必要性を感じたのは行政職員として町の復興に携わった経験が大きかったと振り返る。今後は環境や社会、経済の併立が必要で、より持続的な仕組みを考えている。そこで町に小学生から大学生に来てもらい体験学習やインターンを通して持続可能な社会づくりの重要性を伝えている。

教育活動以外にも研究者として南三陸町にある志津川湾での生態調査や牡蠣のASC認証取得とASC認証牡蠣の良さを伝える活動をイノベーションを駆使して町の漁業関係者などと協力して行っている。また、SDGsを町内の企業や事業者の方々に「自分ごと」として捉え、取り組みやすくする為『南三陸版SDGsチェックリスト』を作成した。太齋さんは、南三陸を学びの先進地にし、震災後のレジリエントな社会にしたいという思いのもと今日も活動を続けている。

取材後記

私はこの取材を通して、太齋さんが南三陸町を学びの先進地にし、震災後のレジリエントな社会の実現に向け、地域と緊密に連携しながら活動をしておられることに興味を湧いた。教育や研究、そして町内の企業の困りごとをサポートするという異なる視点から持続可能なまちづくりの形成に向けて取り組んでおられることを強く感じた。私自身も自分の興味や関心のある「環境問題」という分野に積極的に活動をしていき、チャレンジを積み重ね、自分の武器を磨いていこうと思う。



取材先：太齋彰浩さん

一般社団法人サステナビリティセンターの代表理事。サステナビリティセンターは、震災後の資源循環型の新たなまちづくりを行う南三陸町を拠点に環境、経済、社会の両立と豊かな生物多様性を目指した地域活性化と人材育成に取り組むという理念のもと設立された。春と夏にはインターンシップのコーディネーターも行っている。

取材者：吉村 哲哉

立命館大学経済学部2回生。奈良県生まれ。高校時代にSDGsを知り、大学入学後は、地域とボランティア活動に関する団体にも加入。趣味はサイクリングとラジオを聴くこと。





社会問題に対して行動する一歩目を後押ししたい ～不完全燃焼を活かす～



Change School Japan 事業の様子

きっかけは小さなこと

—藤田さんが社会問題に興味を持ったきっかけを教えてください！（北元）
最初のきっかけは、僕が高校生の時に受けた学校の土曜講座で、NPO 団体の職員の方のお話を聞いた時でした。そこから社会問題に関心を持ちました。さらに、関心が深くなったのは修学旅行で行ったタイです。社会問題を背負わされている当事者と直接関わったことで、問題を肌で感じる事ができたのです。その際のボランティア活動で、自分にも人の役に立つことができると体感し、達成感や自分の存在意義を感じて、最後の時には号泣してしまいました。（藤田）

悔しさを活かす

—大学ではどんなことをされてきましたか？（北元）
大学ではカンボジア農村地域への教育支援をしている団体に所属していました。大学の活動を通して、自分はすごく恵まれていて社会問題を知る機会がありましたが、多くの大学生は社会問題のことを知らないということに気が付きました。人は社会問題に関わり、加担している場合がありますが、自分自身が問題に加担していることに気づいている人が非常に少ないのです。「自分が恵まれていた分、自分がやらない」と思い、社会問題を意識してもらうためにはそれとの接点をより可視化させないといけないと考えました。しかし、団体引退時では何も変えることができなかつたと感じ、不完全燃焼でした。その悔しさもあり、今後もより多くの人に社会問題を知り、行動を起こすきっかけを提供したいと思い、1年間海外で留学や NGO インターンシップなどを行い、前から仲がよく、一緒に東南アジアなどへも行ってた廣瀬（現 Tomoshi Bito 社長）からボーダレス・ジャパンと一緒に教育から社会に関心を持ってもらう事業をやらないかと声をかけてもらい、ボーダレス・ジャパンに就職することになりました。今振り返ると、これまでの経験が偶然ではなく必然だったと思うほど、今の活動に繋がっています。（藤田）

灯したい

—教育事業を通してこれからの若者はどうなってほしいと考えていますか？（北元）

誰に対しても愛情を持って接する人になってほしいです。目の前の人も、社会問題を背負わされている当事者に対してもです。社会が昔よりも複雑になったため、人との関わりが薄くなり、顔が見えない関係性になっています。さらに情報に関しても自分の好きな情報しか取りにいかない情報社会となっています。そのため、社会や政治を知るきっかけが非常に少なく、興味が醸成されにくい状態です。だからこそ、若い時期に教育を通して社会問題を知り、主体的に行動することが重要だと思っています。そのきっかけを増やしていけば、社会問題に対して行動する人が増えると考えています。あなたが変われば、社会は少し変わっていく。子どもたちの心にもしびを灯せるような授業を実施していきたいと思っています。（藤田）



Zoom インタビューの様子

取材先：藤田 一輝さん

ボーダレス・ジャパンの教育事業として、Tomoshi Bito 株式会社の副社長を務める。「社会は変わらない」思考を変える教育プログラムを学校に届ける「Change School Japan」プロジェクトを進行中。

取材者：北元 柊人

立命館大学政策科学部 2 回。立命館大学 SustainableWeek 実行委員会に所属。YouTubeLIVE や高大連携のプロジェクトに参加している。





ピグミー民族との共同生活 ～異文化を通して発見した新たな気づき～



京都栄養医療専門学校 中島さん 活動について

京都栄養医療専門学校に通う中島都子さんはカメルーンに住んでいるピグミー民族と半月間過ごし、ピグミー民族の生活や文化に直で触れた。ピグミー民族との共同生活を決断したのは、人が自然を支配しているようなイメージを持っており、中島さん自身が「社会の中の人」ではなく「生態系の中の人類」であることを感じたいという想いからだった。ピグミー族との生活は毎日生きるために生きているようだったと中島さんは語る。食べものをとるために一日の大半を費やし、持ち寄った食材をみんなで火を囲みながら食べる。中島さんは彼らに溶け込むために彼らと同じ屋根の下で生活した。

異文化を受け入れるということ

ピグミー民族にとって中島さんは異なる文化から自分たちのテリトリーに来た人である。それでも彼らは異文化を拒否することなく受け入れてくれたという。例えば森の中で木の実や虫などを採取していて休憩した際に中島さんには葉っぱを敷いてくれたそうだ。「価値観の違いであったり、宗教や考え方が異なることが原因で起こってしまう戦争や対立も、ピグミー民族のように異なる文化や価値観を受け入れることでなくなるのではないかと」中島さんは話す。ピグミー民族は特に一般的な教育を受けいるわけではないが、異文化を受容する能力は高いそうだ。彼らの振る舞いや接し方を見て異文化を受け入れることの重要さを中島さんは学んだ。

経験を通して得たこと

中島さんはピグミー民族と同じものを食すことで便が黄色くなり、私たちの体は食べたものでできているということをもっと感じたという。その発見から食選択の重要性に気づき、食に対する興味がわいたという。また、人間も自然も動物も虫もすべての命に上下関係や優越はなく、それぞれの役割、個性があって補いながら成り立っていることを知り、多様な人々と補完し合う面白さを学んだそうだ。これからは「食選択の重要性を伝え、病気を予防したい」と中島さんは力強く話した。



取材後記

自分の価値観とは全く異なる価値観の中で生活し、見るもの、感じるもの、経験するものがすべて新しいという状況で中島さんは多くのことに気づき学んだ。いろんな発見があったと話す姿は本当に生き生きしていても、異文化を受け入れる重要さを知ったと語る姿からは寛大さも感じた。

取材先：中島 都子さん

関西学院大学卒業後、京都栄養医療専門学校の栄養士科へと進学。ピグミー族との出会いや父の癌をきっかけに、日々の食選択の重要性を確信し、食から病気を予防することを志す。現在は嵐山にある「発酵食堂カモシカ」にて、発酵食を通じて健康に貢献することを目指す。

取材者：石原 来美

立命館大学食マネジメント学部3年生。興味分野は食と異文化。食べものがどうつくられているかという背景をもっと知るべきという想いを持つ。現在はインターナショナルハウスに住み、留学生と共同生活をしている。



長田区のはっぴーな人・街づくり



はっぴーの家ろっけんの外観

自分の住む街の良いところ 言えますか？

皆さんは自分が住んでいる街の良いところや好きなところをいくつ挙げられるだろうか。挙げるとすればどんなものだろうか。交通の便が良い、商業施設が近い、自然が豊かといった街全体の特徴もあれば、住む人が好き、この店が好き、など固有のものも出てくるだろう。

渡辺さんが活動する兵庫県神戸市長田区は、住みやすい街として決して良いイメージがあるわけではない。在日外国人が多く住んでおり、下町っぽさが残る街である。今回オンラインで取材をしているときに、たくさんの小学生や中学生が渡辺さんの ZOOM カメラに映り込み、私に挨拶をしてくれた。画面越しに見ても仲の良さそうな地域にある、とあるシェアハウスをはじめ、コミュニティの在り方についてインタビューを行った。

はっぴーの家ろっけん

長田区にあるはっぴーの家ろっけんは、1週間の人の出入りが200名に上る介護付きシェアハウス。職種も年齢も国籍もバラバラの人々が入り出すにも関わらず、その外観は看板もない一見普通のビルだ。神戸市役所で働いている渡辺さんは、仕事でまちづくりに関わる中で首藤義敬さん（株式会社 Happy 代表）に出会った。はっぴーの家を建てる前のワークショップでは、地域の人はもちろんのこと多くの人が集まってワークショップが為されたという。

はっぴーの家は地域コミュニティを促進するためにつくられたオープンスペースだと思っている人が多いが、実際はそうではない。首藤さんに会いたい、首藤さんの家族と話したい、といった話したい人を望む人もいれば、子どもの面倒を見てほしいお母さん世代や友達と放課後を過ごしたい子どもたちもいる。ハッピーの家に来る人、住む人、働く人は全て「はっぴーのファン」であり、それぞれに「行きたいと思う理由」が存在している。多くの人の「行きたい理由」が組み合わさったとき、はじめて「理想のコミュニティ」なるものを創り出すことが出来る。

なんのためのコミュニティか

「コミュニティ」という単語がよく使われているが、人を集めて作った繋がりや何をしたいのかを明確にする必要がある、と渡辺さんは語る。はっぴーの家の周りでは、仲の良い友人が集まるはっぴーの家という場所があり、その理念や代表の想いに共感した人がまた友人を連れてくるという芽づる式でコミュニティが広がっているという。

社会課題解決のためと名義付けられたコミュニティでは、結局誰のために何をしたいのか分からなくなる。身近な人が困っていることをみんなで一緒に解決していくことが結果的には社会のためにつながっていると知ることができれば、より気軽に人と関わることができるのではと渡辺さんは語っておられた。

取材後記

都市地域デザインが専門の私は、はっぴーの家のことをテレビで見たときにとっても感銘を受け、地域コミュニティの正しい作り方を学ぼうと今回渡辺さんに声をかけた。話を聞かなかで、コミュニティを形成する意義を考えるきっかけになり、地域での人同士の繋がりや可能性の糸口が見えた。

取材先：渡辺祥弘さん

神戸市職員 12 年目。密集市街地のまちづくりで長田区に 6 年関わり、現在は住宅の耐震化を進めている。プライベートでは、き家改修を 2 件し、最近まちを応援する NPO 法人を設立。まちの課題に、いろんな人と繋がり遊びながら取り組む。



取材者：西野日菜

立命館大学理工学部 4 回生。大阪府枚方市出身。まちづくりやコミュニティの在り方に興味をもち、自身の研究課題としている。趣味は音楽演奏で、編曲や作曲にも挑戦中。

